

産地の異なるさとうきび苗の生産力について

(第3報) 第3作目の生育, 収量について

大内山茂樹・鮫島常喜・児玉三郎
(九州農業試験場)

OUCHIYAMA, S., SAMESHIMA, T., and KODAMA, S.

On the Productivities of Sugarcane Seedpieces Raised in Different Localities.

(III) Growth and yield in the 3rd year.

前報において、種子島産、琉球農試産および徳之島糖業支場産の苗の生産力の差異について、1・2作目の試験結果を報告した。本報告はこれら産地の異なる苗の第3作目の結果である。

試験方法

品種はN; Co 310 を用い、第1表に示すほかは耕種基準に準じ、3区制で行なった。生育ならびに収穫物の調査は調査基準によって行なった。

試験成績および考察

発芽・萌芽の際の気象条件は平年に比べて悪かった。初期生育は各栽培型とも順調にすすんだが、生育最盛期の7月に干害をうけて生育は緩慢となり、とくに春植の生育がそ害された。

収穫物の調査結果は第2表に示すとおりである。原料茎長についてみると、春植では導入苗がすぐれているが、夏植・株出では大差はない。茎径はほとんど差がみられず、区間に一定の傾向を認めない。また茎数および平均1茎重は、導入苗が種子島産よ

りも全般的にすぐれる傾向がみられた。

蔗汁質は、夏植をのぞき全般的に収量の少ない種子島産が良好であり、夏植では導入苗がすぐれる傾向がみられるが、その差はごくわずかである。

以上の結果、春植では1茎重の多いものほどa当り収量も多く、可製糖量も種子島産に比べて沖縄産が13%、徳之島産が20%増収している。夏植でも、導入苗が茎重で11~12%多く、可製糖率も高いので、可製糖量は種子島産より約20%増収している。株出でも導入苗が可製糖量で11%多く、いづれの栽培型でも導入苗が種子島産よりも増収を示した。また1~3作を通じて、年次間あるいは栽培型によって増収率に若干の差はあるが、導入苗の増収効果が認められた。なお別の試験によれば、種子島で連年栽培してきた材料を寒冷紗室で隔離栽培して採苗したものは、普通ほ場のものより春植・株出で5%、夏植で20%増収している。この増収は、苗の素質あるいは病害の汚染度の差などによるものと考えられるが、種子島のさとうきびのほとんどがモザイク病・矮化病におかされており、モザイクによる減収率もかなり高いので、今後は病害との関連で導入苗の増収効果を検討したい。

第1表 栽培型および耕種概要

栽培型	1区面積	栽植密度	植付時期		収穫時期	
			年月日	年月日	年月日	年月日
春植	48.6 m ²	100 × 30 cm	4. 4. 20	42. 3. 2		
夏植	30.0	〃	40. 8. 24	42. 3. 1		
株出	28.0	〃	41. 4. 8	41. 12. 20		

(注) 株出の植付時期は排土日を示す。3区制

第2表 収穫時の生育収量と登熟

栽培型	項目 産地	原 料			a 当 り					ブックス	糖度	純糖率	可製糖率
		茎長 cm	茎径 cm	1茎重 g	茎数 本	茎重 kg	同指数 %	可製糖量 kg	同指数 %				
春植	種子島	119	2.07	414	1,167	481	100	63.8	100	20.1	16.8	88.6	13.07
	沖 縄	129	2.07	455	1,200	549	114	72.4	113	19.9	17.4	87.4	13.27
	徳之島	140	2.07	506	1,154	591	123	76.3	120	19.6	17.5	87.9	13.08
夏植	種子島	237	2.14	876	1,198	1,051	100	127.0	100	19.4	17.3	88.9	12.11
	沖 縄	233	2.06	867	1,362	1,181	112	150.6	119	18.8	15.5	87.4	12.72
	徳之島	238	2.06	935	1,257	1,170	111	153.3	121	19.8	18.1	90.3	13.17
株出	種子島	206	2.23	783	935	752	100	96.0	100	19.4	17.0	87.5	12.78
	沖 縄	196	2.18	816	994	811	108	106.7	111	19.2	16.8	87.7	12.71
	徳之島	198	2.17	814	1,041	848	113	106.7	111	19.1	16.7	87.0	12.62